（4）華妃墓盗掘の逸話

八、九世紀における長安近郊の墓地の数量と空間の拡大は、さまざまな問題を生じさせた。誰もが求める墓葬地の立地環境が限られているために、歴代の墓域が特定の地域に重なる事例も生じている。ただ、最大の問題の一つが、盗掘が多発する問題であったことは疑いない。ここでは、玄宗期の長安の退廃的な風潮をうかがわせる悲惨な逸話として、しばしば引用されてきた「華妃」（『太平広記』巻三三〇、出『広異記』、北京・中華書局、一九六一年、二六一九頁）をここにあげ、この物語を、長安住民と葬地の視角から眺めてみよう(64)。

開元（七一三―七四一）初のこと、華妃は（玄宗の）寵愛をうけて慶王の李琮（？―七五二）を生み、長安で薨じ葬むられた。開元二八年（七四〇）になり、盗掘団が華妃の墓を盗掘しようともくろみ、華妃の墓から百余歩離れた場所に偽の大きな墳墓を造営して埋葬作業をしようとした。偽の墓の中から密かに地下道を掘り、直接に華妃の墓室に到達した。華妃の棺を裂くと、華妃はまだ生きているかのようであり、手足もみな屈曲するほどだった。盗掘者たちは、恣に凌辱を行った。腕を切って金の釧（うでわ）をとり、同時に華妃の舌を切り取った。華妃が夢に出て、盗掘団の行為を生者に訴えることを恐れたのである。墓室の側に華妃の屍を立たせ、陰部に燈燭を置いた。墓室内から盗み取った珍宝は、数えきれないほどの分量に達し、みな偽の墓に運んで安置した。

長安城内からは、空の棺柩を輜車（じしゃ）に載せて偽の墓に運び、日が暮れると盗掘団は墓の中に泊まって、盗んだ珍宝を魂車（死者の神霊を運ぶ車）と送葬車（遺体を運ぶ車）の中に移し、車をおおい隠して城内にもどろうとした。

埋葬する前、慶王は、夢の中で華妃が髪をふり乱して裸で現れ、泣き悲しみながら嘆く姿を見た。華妃は、「盗賊が私の墓をあばき、私を切り裂き凌辱しました。孤魂（安泰を得られない魂）は罪もないのに辱められ、あなたに述べることばもありません。しかし、私は、春明門（長安城東壁の城門で城内外を結ぶ幹線が通る）で盗賊たちが必ず捕まる姿を見ています。皇帝に、この状況をつぶさに告げてください。」という。

慶王は、もとより孝に厚い人であり、華妃のことばに驚いて起床し号泣した。朝になって宮城に入り、夢に見

たことを皇帝に上奏した。皇帝は、ただちに京兆尹と万年令を召喚し、盗賊団を捕捉するように命じて準備させた。盗掘団が、車に盗品を載せて城内にもどり春明門を過ぎる際に、門吏が呼び止めて車中を捜索すると、車中のものは、皆、華妃墓の宝物だった。盗賊団は、すべて収監された。

京兆府において盗掘犯を尋問して罪状を吐かせ、逮捕したもの数十人におよんだ。皆、貴戚の子弟の品行不良なものたちである。そこで、慶王は、盗賊団の主導者五名を選び、親の仇に報いたいと申し出た。皇帝は、この願いをゆるした。慶王は、主導者たちの五臓をえぐり出し烹（に）てこれを祭った。その他の盗賊たちは、みな、于京兆府の門の外で榜殺された。慶王は、貴妃を改葬して三年の喪に服した。

開元初、華妃有寵、生慶王琮、薨葬長安。至二十八年、有盗欲發妃冢。遂于塋外百餘步。偽築大墳、若將葬者。乃于其内潛通地道、直達冢中。剖棺、妃面如生、四肢皆可屈伸、盗等恣行凌辱。仍截腕取金釧、兼去其舌。恐通夢也、側立其尸、而于陰中置燭。悉取藏内珍寶、不可勝數、皆徙置偽冢。乃于城中。以輀車載空棺會。日暮、便宿墓中、取諸物置魂車及送葬車中、方掩而歸。其未葬之前、慶王夢妃被髪裸形、悲泣而來曰。盗發吾冢、又加截辱、孤魂幽枉、如何可言。然吾必伺其敗于春明門也。因備説其狀而去。王素至孝、忽驚起涕泣。明旦入奏、帝乃召京兆尹萬年令、以物色備（『廣異記』作捕）。盗甚急。及盗載物歸也、欲入春明門、門吏訶止之、乃搜車中、皆諸寶物。盡收羣盗。拷掠即服、逮捕數十人、皆貴戚子弟無行檢者。王乃請其魁帥五人、得親報仇、帝許之。皆探取五臓、烹而祭之。其餘盡榜殺于京兆門外。改葬貴妃、王心喪三年。（出『廣異記』）

この物語は、粛宗至徳二年（七五七）に進士科に登第の載孚（生卒年不詳）の編纂した伝奇小説集『広異記』に掲載されている。実話とは思えないが、登場人物と時代背景は史実にもとづくことで、信憑性が生じるように作話されている。すなわち、華妃は、もともと皇后につかえる正一品の内官の一人であり（「其位、惠妃也、麗妃也、華妃也。」『六典』巻一二、内官、妃三人、正一品の原注、北京・中華書局、一九九二年、三四七頁）、この物語の華妃は、実在の劉華妃をさす。劉華妃は、この物語に登場する唐玄宗の長子である奉天皇帝李琮（?―七五二）を始め、靖恭太子李琬（?―七五五）、儀王李璲（?―七六五）の三子を生んだ（『旧唐書』巻一〇七、玄宗諸子、李琮、三二五八頁、『新唐書』巻八二、宗諸子、

三六〇六頁）。

玄宗と華妃の長子・李琮（？―七五二）は、本名を李嗣直といい、先天元年（七一二）に郯王となり、長安の延福坊（C9）に王府を開いている（『両京新記輯校』巻三、延福坊、四二頁）。開元一三年（七二五）に慶王となり、開元二一年（七三三）に、太子大師を加えられ、李琮に改名した。天宝一一年（七五二）に死去し、靖徳太子を贈られ、長安城西南の細柳原に葬られ、長安城南壁の啓夏門の内に廟を置いたという。粛宗元年建寅月（七五六）九日に、奉天皇帝を追冊された（同上『旧唐書』巻一〇七、三二五八頁）。前述の悲惨な逸話は、劉華妃や李琮、玄宗等の実在の登場人物を配して、春明門の東郊に王侯貴族の墓地が造営される八世紀以後の風潮を背景に生まれており、物語ではあるが、当時の盗掘の激しさと、長安貴族社会の腐敗の一端を暗示している。

人口に膾炙したこの物語からうかがえることは、当時の死生観にもとづくと、死と生の区別は相対的で限りなく曖昧であり、両者は連続して相互に入れ替わることのできる存在だったことである。死者は、来生で生き続けているために生者と交流ができ、生者に影響を与え続けたのである。特に、中国の場合は、父系の祖先崇拝を通して血縁集団を維持・存続させるために、被葬者の社会的地位は、死後もそのまま継承された。華妃という当時比類無き高貴な存在に冒涜を加える盗掘集団の行為は、血縁関係に根ざすこのような当時の社会秩序を、根底から破壊する行為そのものだったのである。

3．死後の世界―墓壁画と線刻画に描かれた生前の生活―

（1）隋唐時代の死生観

前述のように、儒教に集成された中国の伝統的な死生観によれば、人は死ぬと天に帰る魂（陽の気でつくられた精神

のこと）と地に帰る魄（陰の気でつくられた肉体のこと）に分離する。魄は、生前と同様の生活を続けながら地下の墓中に宿り、子孫が魂をまつることで分離した魂と魄は再び合体することができると考えられた。皇帝陵の場合も、亡くなった皇帝は、生前と同じ政務を行い飲食して生活すると考えられており、宮殿を模し宮殿に匹敵する皇帝陵がつくられた。

四～七世紀にかけて体系化される道教の生命観も、基本的に霊肉二元論にたつが、三浦國雄氏によれば、道教は、不死に対する信念の強さ、肉体に対する強い執着、不老不死の現実化にむけての多様な技術の開発において、儒教や仏教と比べても際だった生命観と身体観を備えているという(65)。中国伝統の宗教観にもとづく道教の形成は、中国外部から将来された仏教の浸透に対抗する中で進展していき、仏教とも融合しながら唐宋以後の中国社会に深く広く浸透していくようになった(66)。

四～七世紀におけるユーラシア大陸の動乱を契機に、仏教の死生観が東アジアに浸透していくと、因果応報にもとづく、仏教独自の冥界観が唐長安の住民にも影響を与えるようになる(67)。たとえば、次の『法苑珠林』巻四六、思慎篇第四四、感応縁、唐親衛高法眼（唐釈道世著、周叔迦・蘇晋仁校注『法苑珠林校注三』北京・中華書局、二〇〇三年、一四一三－一四一四頁、『大正大蔵経』〇六四〇 b 二八）には、つぎのような因果応報譚がある。なお、この説話は、唐長安の住民を念頭におき、長安の都市空間を舞台につくられているので、**図6**長安の都市空間を参照しながらお読みいただければと願う。

唐の雍州長安県出身の高法眼は、隋の僕射高熲（？－六〇七）の玄孫にあたる。高法眼は、龍朔三年（六六三）正月二五日に、皇城内の尚書省の吏部で銓選（官人選考試験）をうけ、正午になり自宅に帰ろうとした。高法眼の自宅は、義寧坊（A3）の東南隅の区画にあり、大通りに向かって門を開くことがゆるされていた。義寧坊東南隅の化度寺の東側が高法眼の邸宅だった。

高法眼は、皇城の西門の順義門を出ようとしたところ、皇城の中から二頭の馬に乗った騎馬人が自分の後を追ってきた。皇城を出ると、二騎は次第に迫ってくる。皇城順義門をぬける（東西に延びる）大通りの北には、普光

寺（頒政坊C3南門東の区画）がある。騎馬の一人が他の一人に話しかけ、「おまえは、普光寺の門の前まで走り、この人が普光寺に入り捕捉が困難になるのを防げ。」という。呼びかけられた騎者は、それを受けて普光寺の門に走り、高法眼が門内に入れないように陣取った。

高法眼は、怖くなって普光寺に入ることができず、さらに西方に向かって走り続け、（隣の）金城坊（B3）の南門にいたった。南門前の大通りの西側には、会昌寺（金城坊B3西南隅の区画）がある。高法眼を追う騎者は、四人に増えた。後ろの騎者が前を走る二人の騎者に声をかけ、「急いで会昌寺の門を守れ。」という。このことばを受け、騎者が走って会昌寺の門に陣取った。

高法眼は、ますます恐ろしくなって騎者に尋ねた。「汝は何者か。なぜ私をしつこく追うのか。」騎者は、「王が、汝をつかまえるように私をつかわしたのだ。」と答える。高法眼が、「どこの王の使いか。」と尋ねると、騎者は、「閻羅王（閻魔大王）の使者だ。」と答えた。高法眼は、閻羅王の使者が来たのだと聞き、彼ら騎者たちが自分を地獄に連れて行く鬼であることを知り、同行を拒んだ。鬼は大いに怒り、「すぐに頭髪を切れ。」と怒鳴り、一人の鬼が刀をもって高法眼の両髻を切りとり、髪とともに肉も地面に切り落とした。高法眼は、そのまま西街に向かって走ったがとうとう悶絶し、落馬して暴死した。はからずも大街の要衝であったために、高法眼が倒れていると見物するものが千人を越すにいたった。巡街果毅（京兆府に属する城内警護の役人）がかけつけ、人が集まっている訳を通りの人に尋ねると、見ていたものたちは巡街につぶさに経緯を述べた。そこで、大街のすぐ西方に高法眼の邸宅があるので、家人を呼んで高法眼の亡骸を輿に載せて自宅に運ばせた。

高法眼は、明朝になると蘇生し、家人に語って、「私は、地獄に入り閻羅王にまみえた。王は、大きな高座におり私をにらみつけて、『汝は、何のために化度寺の明藏法師の僧房の中に入って常住の僧のための果子（果実等の食べ物）を食べたのだ。（その罪により）四百顆の熱した鉄丸を四年で呑み終えよ。人の世界の一日は、地獄では一年にあたる。だから、四日で飲み終えることができる。正月二六日から二九日までに飲み終えよ。毎日百顆を飲め。』と告げられた。」という。

高法眼が二六日に目を覚ますと、また鬼たちが来て、再び争ったが力負けして、また悶絶して暴死した。地獄にいたると、鉄丸を呑ませられた。呑む際に、喉が収縮して身体が熱く焦げつき赤くなったが、呑み終えるとまた生き返った。生き返ると、王は、また、「汝は、なぜ三宝（仏法）を敬わず、仏僧の悪口を言ったのだ。鉄丸を飲み尽くした後、さらに鉄の犁で舌を一年間耕せ。」と命じた。

正月二九日になると、鉄丸はすべて飲み終えた。正月三〇日の朝に、再び死んで地獄の中にいたり、今度は鉄の犁で舌を耕す罪を受けた。自分の舌は耕されて長さ数里（唐の一里は約五五〇ｍ）になり、傍らの人は一尺余りの舌（唐の一尺は約三〇㎝）をはき出していた。王は、また獄卒に命じて、「こいつは、三宝の長短をあげつらったので、大きな鉄の斧で舌の根っこを切り取ってやれ。」と命じた。獄卒は、高法眼の舌を何度も截断しようとしたができなかった。王は、また述べた。「斧でその舌を切り刻み、煮えたぎった釜の熱湯の中に放り込め。」

しかし、熱湯の中で煮ても、高法眼の身体は爛れなかった。王は、怪んで高法眼に原因をたずねた。高法眼は、「臣は『法華經』を読んだことがあります。」と王に申し上げた。王は、初めはそのことを信じなかったが、功徳を検査する部局で調べさせると、確かに、高法眼が法華経三経一部を読んだことが案件に記されていた。王は、事実であることを確かめると、始めて地獄から高法眼を放出することにした。

高法眼は、今も生存する。生き返った身体は、もとのままである。生き返った高法眼を一目見ようと多くの人々がかけつけ、見た者はみな仏門に入った。家族全員で仏教を敬うようになり、よく教えを守り修行を怠らず、誠に倦むことが無かったという。このことは、長安の仏教徒も俗人も、みなよく知っている話であり、嘘偽りないことである。

唐 雍州 長安縣 高法眼、是隋代僕射高熲之玄孫。至龍朔三年正月二十五日、向中臺參選、日午還家、舍在義寧坊東南隅、向街開門。化度寺東、即是高家。欲出子城西順義門、城内逢兩騎馬逐後。既出城已、漸近逼之。出城門外、道北是普光寺。一人語騎馬人云、「汝走捉普光寺門、勿令此人入寺、恐難捉得。」此人依語、馳走守門。法眼怕不得入寺、便向西走、復至西街金城坊南門。道西有會昌寺、復加四馬。騎更語前二乘馬人云、「急守會昌

寺門。」此人依語、走捉寺門。法眼怕急、便語乘馬人云、「汝是何人。敦逼於我。」乘馬人云、「王遣我來取汝。」法眼語云、「何王遣來。」乘馬人云、「閻羅王遣來。」法眼既聞閻羅王使來、審知是鬼、即共相拒。鬼便大怒云、「急截頭髮。」却一鬼捉刀即截法眼兩髻、附肉落地。便至西街悶絕、落馬暴死。不覺既至大街要路、踟躕之間、看人逾千。有巡街果毅、瞋守街人何因聚眾。守街人具述逗留。次西街首、即是高宅、便喚家人輿向舍。

至明始蘇、便語家内人云、「吾入地獄、見閻羅王、昇大高座、瞋責吾云、「汝何因向化度寺明藏師房内食常住僧果子。宜呑四百顆熱鐵丸、令四年呑了。人中一日當地獄一年。四日便了。從正月二十六日至二十九日便盡、或日食百顆。當二十六日惺了之時、復有諸鬼取來、法眼復共鬼鬪相趁、力屈不加、復悶暴死。至地獄令呑鐵丸、當呑之時、咽喉開縮、身體焦捲、變為紅色、呑盡乃蘇。蘇已、王又語言、「汝何因不敬三寶、說僧過惡。汝呑鐵丸盡已。宜受鐵犁耕舌一年。」至二十九日、既呑鐵丸了、到正月三十日平旦復死、至地獄中、復受鐵犁耕舌。自見其舌長數里、傍人看見吐出一尺餘。王復語獄卒、「此人以說三寶長短、以大鐵斧截却舌根。」獄卒斫之不斷。王復語云、「以斧細剉其舌、將入鑊湯煮之。」煮復不爛。王復怪問所由。法眼啓王云、「臣曾讀法華經。」王初不信、令檢功德部、見案内有讀法華經一部。王檢知實、始放出來。

其人見在、蘇惺如舊。觀者如市、見者發心。合門信敬、勵志精勤、檀忍不虧、誠誠無倦。京城道俗共知、不煩引證。

この仏教説話は、長安の都市空間を縦横に用いる物語展開となっており、長安の住民を対象に仏僧たちや仏教徒たちの語る語り物であったことを示唆している。長安の仏寺が、一種のアジール（聖域ないし無縁所）とする観念が、仏教の浸透とともに存在するようになったことも示している。

また、この話からは、仏教による因果応報の観念の流入が、中国古来の冥界観を変えていくこともうかがえる。因果応報という考えは、仏教が中国に将来したものである(68)。因果応報などの仏教の思想は、必然的に、仏法という普遍的で超越的な価値観に人々が向き合うことを要請し、結果的に、家族や集団を強調する古来の儒教では弱かった個人という意識を醸成させることになった。仏教の普及が、個人の意識に根ざした「世俗的」な社会を生み出す種を